

日蓮大聖人御書全集

いちだいごじけいず

一代五時鶏凶

新版  
902  
〜  
913

いちだいごじけいず

# 一代五時鶏凶

らじゅうやく

羅什訳

ひやくろん

百論

せんかん

千卷

だいろん い

大論に云わく「十九出家、三十成道」

じゅうくしゅつけ さんじゅうじょうどう

りゅうじゅぼさつ

竜樹菩薩

だいじゅういちめみよぼさつ みでし

第十一馬鳴菩薩の御弟子

みょう

猛

ふほうぞう だいじゅうさん

付法蔵の第十三

じゅみょうさんびやくねん

寿命三百年

ほううんじざいおうによらい

法雲自在王如来

ほとけ めつご さん ろく しち はち

仏の滅後 三・六・七・八

さんじゅうまんかん

三十万卷

だいしんろん

大心論

じゅうまんかん

十万卷

だいひほうべんろん

大悲方便論

じゅうまんかん

十万卷

だいむいろん

大無畏論

じゅうまんかん

十万卷

じつだいじよう  
実大乘

ごんだいじよう  
権大乘

にしちにち  
二七日

けごんぎよう  
華嚴経

さんしちにち  
三七日

けつきよう ぼんもうきよう  
結経は梵網経

ごきよう た いちだい おさ つ  
五教を立てて一代を撰め尽くす

とじゆんかしよう  
杜順和尚

けごんしゆう  
華嚴宗

ちごんほつし  
智儼法師

ほうぞうだいし  
法蔵大師

だいじようかい  
大乘戒、これをいだす

こうぞうだいし  
香象大師

げんじゆほつし  
賢首法師

けごんかしよう  
華嚴和尚

しょうじょう  
小乗

じゅうにねん  
十二年

阿含經

けつきょう  
結經は遺教經

じょうあごん  
長阿含

ちゅうあごん  
中阿含

ぞういちあごん  
増一阿含

ぞうあごん  
雜阿含

しょうじょうかい  
小乗戒、これをい  
出だす

じょう  
定

きょう  
經

くしやしゅう  
俱舍宗

ろん  
論

じょうじつしゅう  
成実宗

かい  
戒

りつしゅう  
律宗

あるいは云わく法華已前ほっけいぜん 彌勒菩薩説みろくぼさつせつ 三時を立てて一代を撰め尽くすさんじ た いちだい おさ つ

あるいは云わく法華已後ほっけいご 無著菩薩筆むじゃくぼさつひつ 六經十一論ろつきようじゅういちろん

有相宗うそうしゅう

深密經じんみつぎよう 五卷ごかん 瑜伽論ゆがろん 一百卷いっぴやくかん 法相宗ほっそうしゅう 玄奘三蔵げんじようさんぞう

唯識論ゆいしきろん 三十頌さんじゅうじゆ 世親菩薩造せしんぼさつぞう 慈恩大師じおんだいし

世親菩薩造せしんぼさつぞう

楞伽經りようがきよう

禅宗ぜんしゅう

達磨大師だるまだいし

あるいは諸法無行經しよほうむぎようきよう

あるいは云わく金剛般若經こんごうはんによきよう

あるいは云わく大円覚經 だいえんがくきょう

あるいは首楞嚴經 しゅりょうごんぎょう

大乘 だいじょう

あるいは云わく一切經 いっさいきょう

あるいは説時不定 せつじふじょう

あるいは云わく教外別伝 きょうげべつでん

あるいは十六年 じゅうろくねん

一卷七枚 いっかんしちまい

あるいは云わく竜樹造 りゅうじゆぞう

あるいは八箇年 はちかねん

菩提心論 ぼだいしんろん

あるいは云わく不空造 ふくうぞう

方等部 ほうとうぶ

権大乘 ごんだいじょう

瓔珞經 ようらくきょう  
結經 けつきょう

大日經 だいにちきょう  
七卷 しちかん

善無畏三藏 ぜんむいさんぞう

金剛頂經 三卷

真言宗

金剛智三藏

蘇悉地經 三卷

顯密二道を分かち、五藏を立つ。

あるいは十住心を立つ

不空三藏

あるいは云わく方等部

一行阿闍梨

あるいは云わく華嚴部

あるいは般若部

あるいは云わく法華部

あるいは云わく涅槃經部

あるいは一代諸経の外いちだいしよきよう ほか

難行・易行なんぎよう いぎよう

曇鸞法師どんらんほっし

双観経そうかんぎよう

聖道・浄土しやうどう じやうど

道綽禪師どうしゃくぜんじ

観経かんぎよう

浄土宗じやうどしゆう

善導和尚ぜんどうおしやう

阿弥陀経あみだぎよう

雑行・正行ぞうぎよう しやうぎよう

懷感禪師えかんぜんじ

諸行・念仏しよぎよう ねんぶつ

少康法師しやうこうほっし

法照ほうしやう

三十年さんじゆうねん

あるいは云わく二十二年い にじゆうにねん

あるいは云いわく十四じゅうしねん年

光讚こうさん般若はんにゃ

あるいは云いわく四しろんしゅう論宗

金剛こんごう般若はんにゃ

あるいは法ほつしやうしゅう性宗

天王てんのうもん問もん般若はんにゃ

百ひやく論ろん 提婆だいば菩薩ぼさつぞう造

あるいは無むそうしゅう相宗 淨じやう影よう

摩訶ま般若はんにゃ 大だい品ほん般若はんにゃ

中ちゅう論ろん 竜りゅう樹じゅ菩薩ぼさつぞう造

三さん論宗ろんしゅう 興こう皇おう

般若はんにゃ經きやう

十二じゅうに門もん論ろん 同どう

三さん時じを立たて 嘉か祥じやう寺じの吉きち藏ぞう大だい師し

仁王にんのう般若はんにゃ 結けつ經きやう

大だい論ろん 同どう

一いち代だいを撰おきめ尽つくす 道どう朗ろう

あるいは二に藏ぞうを立たつ

あるいは三さん轉てん法ぽう輪りんを立たつ

けごんさんしちにち あごんじゅうにねん ほうどう ほんにやさんじゅうねん いじょうしじゅうにねん  
華嚴三七日、阿含十二年、方等・般若三十年、已上四十二年なり

ほうかいしょうろん い しじゅうにねん  
法界性論に云わく四十二年

むりようぎきよう い ほうべんりき ゆえ しじゅうよねん  
無量義経に云わく「方便力をもつての故に、四十余年に

しんじつ あらわ  
はいまだ真実を顕さず」

い むりようむへんふかしぎあそうぎこう す つい  
また云わく「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終

むじようぼだい じよう え ゆえん ぼだい  
に無上菩提を成ずることを得ず。所以はいかん。菩提の

だいじきどう し ゆえ けんきよう い るなんおお ゆえ  
大直道を知らざるが故に、 險逕を行くに、 留難多きが故な

り」

い だいじきどう い るなんな ゆえ  
また云わく「大直道を行くに、 留難無きが故なり」

しよしゆうえびようしゆう  
諸宗依憑宗

ぶつりゆうしゆう

仏立宗

てんだいしゆう

天台宗

ほつけしゆう

法華宗

ひみつしゆう

秘密宗

けんろしやうしやくしゆう

顕露彰灼宗

ほけきよう  
法華經

ふげんぎよう

普賢經

えいざんかいだん

叡山戒壇

せそん

「世尊は法久しくして後、

のち

かなら

要<sub>まさ</sub>ず<sub>しんじつ</sub>当<sub>と</sub>に<sub>と</sub>真実を説きたもうべ

し」

前ぜん四し味みなり あるいは云いわく前ぜん四し教きょう あるいは云いわく前ぜん三さん教きょう あるいは云いわく前ぜん三さん教きょう あるいは云いわく先さきの三さん教きょうに円えん教きょうを撰おさめ尽つくす

はい  
廃はいなり

しょうじき ほうべん す  
むじようどう と

「正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて、ただ無む上じよう道どうを説とくのみ」

しじ しちきよう ごじ はつきよう  
四し時じ・七しち教きょう、五ご時じ・八はち教きょう

ゆいいちぶつじよう  
唯ゆい一いち仏ぶつ乘じよう

しゆじゆ どう しめ  
じつ ぶつじよう

「種しゆ々の道どうを示しめすといえども、それ実じつには仏ぶつ乘じようのためなり」

ま ほとけ な わ こころ のうらん

「はた、魔まの仏ほとけと作なつて、我わが心こころを悩のう乱らんするにあらずや」

ひさ よう もく つと すみ と

「久ひさしくこの要ようを黙もくして、務つとめて速すみやかに説とかず」

(已) けごんぎよう だいにちきよう じんみつぎよう りようがきよう だいほんきよう かんぎようとう  
華け嚴ごん經ぎよう・大だい日にち經きよう・深じん密みつ經ぎよう・楞りよう伽が經きよう・大だい品ほん經きよう・觀かん經ぎよう等とう

(今) むりようぎきよう  
無む量りよう義ぎ經きよう

(当) ねはんぎようとう  
涅ね槃はん經ぎよう等とう

わ と

きょうてん

むりようせんまんおく

すで

と

「我が説くところの經典は無量千万億にして、已に説き、

いまと まさと と

なか

ほけきよう

今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経

もつと

なんしんなんげ

は最もこれ難信難解なり」

き ろく い

きょうあ

しよきよう

おう

い

記の六に云わく「たとい経有つて『諸経の王なり』と云

いこんとう

せつ

もつと

だいいち

い

うとも、『已今当の説に最もこれ第一なり』とは云わず。

けん

たん

たい

たい

ぎし

兼・但・対・帯なること、その義知るべし」

げん さん

い

ぜつこうちゆう

ただらん

玄の三に云わく「舌口中に爛る」

せん さん

い

いこんとう

みよう

かた

まよ

籤の三に云わく「已今当の妙、ここにおいて固く迷えり。

ぜつただ

や

けほう

ほうぼう

ざい

舌爛れて止まざることは、なおこれ華報なり。謗法の罪は、

くちようこう なが

# 苦長劫に流る

い かんぎよう

また云わく「諫曉すれども止まらず」

や

だいろく まき

## 第六の巻

ほう しえ

法の四依

にん しえ

人の四依

いちにちいちや

一日一夜

「義ぎに依よつて語ごに依よらざれ」

「法ほうに依よつて人にんに依よらざれ」

ねはんぎよう

## 涅槃經

ぶつち

仏智

ぼさつとう しき

菩薩等の識

はちじゅうごにゅうめつ

八十御入滅

しちじゅうく

七十九

はちじゅう

八十

はちじゅういち

八十一

ち よ

智に依よつて

しき よ

識に依よらざれ

はちじゅうに

八十二

ひやくご

百五

ひやくにじゅう

百二十

ほけきよう

法華經

にぜん きようぎよう

爾前の經々

ぞうほうけつぎきよう

像法決疑經

けつぎよう

結經

りようぎきよう

了義經

よ

に依よつて

ふりようぎきよう

不了義經

よ

に依よらざれ

「了義經に依よつて不了義經に依よらざれ」

主しゅ

主上しゅじょう

天尊てんそん

世尊せそん

法王ほうおう

国王こくおう

人王にんのう

天王てんのう

二天にてん

天竺てんじく

師子ししき 頰王よくおう

浄飯王じょうぼんおう

震旦しんたん

三皇さんこう

魔醯まけい 修羅天しゅらてん

毘紐天びちゅうてん

大梵天だいぼんてん

第六天だいろくてん

帝釈天たいしゃくてん

違いすれば八虐はちぎやく

五帝ごてい

三王等さんおうとう

日本国にほんこく

神武天皇じんむてんのう

外道の師げどうし

釈尊しゃくそん

師し

三仙さんせん

師匠ししよう

六師ろくし

違いすれば七逆しちぎやく

外典の師げてんし

迦毘羅かびら

漚楼僧伽うるそうぎや

勒沙婆ろくしゃば

尹喜いんき

务成むせい

しょうあんしやく  
章安釈

しせい  
四聖

ろうたん  
老聃

ねはんしよ い  
涅槃疏に云わく

しゅうこうたん  
周公旦

りよぼう  
呂望

いったい ほとけ しゆ し  
「一体の仏、主・師・親と作る」

こうし  
孔子

がんかい  
顔回

い こぎやく  
違すれば五逆

はっしん  
八親

しん  
親

ろくしん  
六親

せそん さんがいどくそん  
世尊 三界特尊

にじゅうごう  
二十五有

いま さんがい みな わ う  
「今この三界は、皆これ我が有なり」

りしやう こ  
理性の子

けちえん こ  
結縁の子

なか しゅじよう  
「その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」  
わ こ

もんぐ ご い  
文句の五に云わく「一切衆生等しく仏性有り。仏性同じきが故に等しくこれ子なり」  
いっさいしゅじようどう ふっしようあ ふっしようおな ゆえ ひと こ

娑婆有縁の仏

いま ところ もろもろ げんなんおお われいちにん  
「しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人の

よ くご  
み、能く救護をなす」

げん ろく い もと ほとけ したが はじ どうしん おこ ほとけ したが ふたいじ じゆう  
玄の六に云わく「本この仏に従つて初めて道心を発し、またこの仏に従つて不退地に住す」  
もんぐ ろく い きゆう さいほう むりようじゆぶつ

ちようじゃ がつ いま もち さいほう ほとけべつ えんこと  
文句の六に云わく「旧は西方の無量寿仏をもつて、もつ

て長者に合す。今はこれを用いず。西方は仏別にして縁異

なり。仏別なるが故に隠顕の義成ぜず。縁異なるが故に子

ふ ぎじよう きよう しゅまつ まった むねな まなこ

父の義成とぜず。またこの経の首末しやな じゃくだつ ちかに全くこの旨無しし。眼

を閉じて穿鑿せんさくせよ○舎那しやなの著脱ちやくだつは近ちかきすらなお知しらず。

弥陀みだは遠とおきに在あり。何なんぞかへんかんつて変換うんぬんせん」云々

記きの六ろくに云いわく『西方さいほう』等とうとは、弥陀みだ・釈迦しやかの二に仏ぶつ既すでに

殊ことなり。あに、弥陀みだをして珍玩ちんがんの服ふくを隠かくさしめ、乃すなわち釈迦しやか

をして弊垢へいくの衣ころもを着きせしめん。しかれば釈迦しやかに珍服ちんぷくの隠かくす

べきもの無なく、弥陀みだのみただ勝妙しょうみょうの形ぎぎようなるに当あたららん。

いわんや、宿昔むかしの縁別えんべつにして化導けどう同おなじからざるをや。結縁けちえんは

生しょうのごとく、成熟じようじゆくは養ようのごとし。生しょう・養ようの縁異えんことなれば、

父子成ふしじようぜず。珍ちん・弊途へいみちを分わかち、著じゃく・脱殊だつことに隔へだたる。経きようを

消しょうするに事こと闕かけて、調熟じようじゆくの義ぎ乖そむく。当部とうぶの文もんに永ながくこの

旨無むねなし。『舍那しゃなの著脱じゃくだつ』等とうとは、舍那しゃなの動どうぜずしてしかも往ゆ

くことに迷まよう。弥陀みだの弊へいを著じゃくすることは、諸教しよきように文もん無なし。

もし平等びようどう意趣いしゆを論ろんぜば、彼此ひしいずくんぞかみずかつて自ほこら矜あはら

ん。たとい他たをば我わが身みとなすも、還かえつて我わが化けを成じようず。

我われ、他たの像ぞうを立たつるも、乃すなわち他たの縁えんを助たすく。人ひとこれを見みざ

れば、化縁けえん便すなわち乱みだる。故ゆえに知しんぬ、夫かの結縁けちえんはならびに応おう

身じんに約やくすることを。『我昔われむかしかにまんつて二万億とう』等いと云いうがごと

し。いわんや、十六王子、始めより今に至って機感相成じ、  
任運にんうんに分ぶんに解げす。この故ゆえに、彼の弥陀かみだをもつてこの変換へんかんと  
なすべからず」

じゅうろくおうじ はじ いま いた きかんあいじよう

種しゆ・熟じゆく 東方有縁とうほううえん 主しゆ

第一、阿閼仏だいいち あしやくぶつ 師し

脱だつ 親しん

大通の太子だいつう たいし 種しゆ・熟じゆく 西方有縁さいほううえん 主しゆ

十六王子じゅうろくおうじ 第九、阿弥陀仏だいく あみだぶつ 師し

沙弥しゃみ 脱だつ 親しん

種・熟 娑婆世界 主

第十六、釈迦牟尼仏

師

脱

親

記きの九くに云いわく「初はじめこの仏菩薩ぶつぼさつに従したがつて結縁けちえんし、また

この仏菩薩ぶつぼさつにおいて成就じょうじゆす」

玄げんの六ろくに云いわく「仏ほとけなお自みづから分段ぶんだんに入いつて仏事ぶつじを施作せさ

す。有縁うえんの者何ものなんぞ来きたらざるを得えん。譬たとえば、百川ひやくせんの応須まさに

海うみに潮そそぐべきがごとく、縁えんに牽ひかれて応生おうしようすること、また

かくのごとし」

また云いわくき〈前にこれをか書く〉「本もとこのほとけ仏したに従つって初はじめ  
て道心どうしんをおこ発し、またこのほとけ仏したに従つって不ふ退地たいじに住じゆうす」

劣れつ応身おうじんのしゃか釈迦によらい如来

本ほん尊ぞん

成じよう実宗じつしゆう

盧る舎しゃ那な報身ほうしん

勝しょう応身おうじんにあ当あたる

華け嚴宗ごんしゆうの本ほん尊ぞん

釈しゃ迦か如に来よらい

法ほつ相宗そうしゆうの本ほん尊ぞん

勝しょう応身おうじんにあ当あたる

釈迦如来

しやかによらい

三論宗の本尊

さんろんしゅう

ほんぞん

法身

ほっしん

真言宗の本尊

胎蔵界

たいぞうかい

しんごんしゅう

ほんぞん

大日如来

だいにとちによらい

浄土宗の本尊

報身

ほうしん

金剛界

こんごうかい

天台は心身

てんだい おうじん れつおう しょうおう

阿弥陀仏

あみだぶつ

浄土宗の本尊

善導等は報身

ぜんどうとう ほうしん

じょうどしゅう

ほんぞん

五百問論に云わく

ごひやくもんろん

い

ちち

じゆ

とお

し

「もし父の寿の遠きを知らずんば、ま

ふとう

くに

まよ

さいのう

い

まった

ひと

た父統の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全く人の

子こにあらず」

三皇さんこう已前いぜんは父ちちを知らず、人ひと皆みな禽獸きんじゆうに同じおなじ

華嚴けごんのるさな、真言しんごんの大日等だいちにとうは皆みなこの仏ほとけの眷属けんぞくたり  
くおんじつじようじつしゆじつしよう ほとけ

久遠実成実修実証の仏

天台宗の御本尊  
てんだいしゆう ごほんぞん

釈迦如来  
しゃかによらい

応身おうじん

報身ほうしん

有始有終うしうしゆう

有始無終うしむしゆう

始成の三身しじようさんじん

報身ほうしん

有始無終うしむしゆう

真言の大日等しんごん だいちにとう

ほっしん

法身

おうじん

応身

ほうしん

報身

ほっしん

法身

むしむしゆう

無始無終

むしむしゆう

無始無終

くじよう

さんじん

久成の三身

けごんしゆう

しんごんしゆう

むしむしゆう

さんじん

た

てんだい

華嚴宗・真言宗の無始無終の三身を立つるは、

天台の

みようもく

ぬす

と

みずか

えきよう

い

名目を盗み取って自らの依経に入れしなり